

琉球大学学術リポジトリ

音楽的な見方・考え方を働かせ、
問題解決に向かう生徒の育成一学びのつながりを意識した授業デザインと題材構成の工夫一

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, あやの メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019854

音楽的な見方・考え方を働かせ、問題解決に向かう生徒の育成

—学びのつながりを意識した授業デザインと題材構成の工夫—

大城 あやの

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・沖縄市立宮里中学校

1. はじめに

これまでの筆者の授業を振り返ると、生徒は積極的に授業に取り組む一方、「教科の授業は好きだが、学びがどう役に立つかは分からない」等、その思考が学習意欲に直結している生徒も少なくなかった。また、曲の完成等を目標とする結果主義となってしまう、プロセスに焦点をあてていない学びを続けていたことから、活動によっては行事色が強くなってしまいうこともあった。その為、教科の特質とは離れた意識が高まる等、教科本来の学びを実感できていないことが、生徒の発言の原因となっているのではないかと思い、教師自身の思考や指導観の転換が必要だと考えた。

音楽科は、表現領域として3つの活動分野（歌唱・器楽・創作）、鑑賞領域としての鑑賞活動分野と、大きく4つの活動分野があるが、今までの実践は、演奏や批評文の完成がゴールとなりがちであった。その為、音楽的な見方・考え方を、次の活動へ継続して意識することが難しく、視点も教師が示した範囲に留まり、思考の広がりや「なぜ?」「もっと知りたい」「どうにかしたい」という欲求を生徒に持たせることができなかった。また、題材や活動分野が変わると学びがつながりにくくなることも、生徒の知覚や感受が十分にできていないことや、知覚と感受とを結び付け、生徒がどう表現したいかを考えるプロセスを重視していないことが原因だと考えた。さらに、授業改善の視点も教師寄りとなっている為、生徒が学ぶ楽しさ(新鮮さ)や有用性を感じきれていないと考えた。その悪循環を改善する為には、生徒が主体的に学び、音楽的な見方・考え方を働かせた授業を展開することが大切ではないかと考えた。

音楽的な見方・考え方を働かせることは、音楽科の授業意義の中核でもあり、音楽を生活や文化と関連付けて捉えることにもつながる。

そこで、生徒の興味・関心や思考過程に寄り添い、主体的な問題解決に向かわせることで、実感を伴った学びにしていきたいと考え、生徒の学びをつなげる授業デザインや題材構成等を工夫していきたいと考える。それにより、音楽的な見方・考え方を働かせた教科の特質に沿った学びを展開し、生徒に教科の学びの有用性を感じさせられるのではないかと考え、本テーマを設定した。

2. 研究の目的

音楽的な見方・考え方を働かせ、教科の特質に沿った主体的な問題解決が図られるよう、生徒の興味・関心や思考過程に寄り添った授業デザインや学びをつなげる題材構成を明らかにする。

3. 理論研究

(1) 音楽的な見方・考え方を働かせ、問題解決に向かう生徒とは

① 「音楽的な見方・考え方」についての捉え

中央教育審議会(2016)(教育課程部会芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ)では、音楽的な見方・考え方について「芸術系教科・科目では、「見方・考え方」を働かせながら知識・技能を習得したり、「見方・考え方」が成長することにより思考力・判断力・表現力等が深まり豊かなものとなったりすると同時に、「見方・考え方」を通じて社会や世界とどのように関わるかという点が学びに向かう力

や人間性の育成に大きく作用する」と述べている。

本研究では、音楽科における「見方」を、生徒が音楽に対する感性を働かせながら、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それから生まれる質をイメージをもって捉えること(感受)、「考え方」を、音を媒体として表現・鑑賞を探究していく問題解決のプロセスで働く音楽的思考と捉える。そして、音楽に対する知覚・感受を支えに、音楽をイメージや感情、背景等と関連付け、自分自身や社会等にとって音楽がどのような意味をもつのかを、生徒自身が見出していけるように学習を進めていく。

②問題解決に向かう生徒の捉え

教科の学び、自らの学びに向かう方法として、田村(2020)は「思いや願いを実現し、目の前の課題を解決していくプロセスの充実が欠かせない」と述べており、音楽的な見方・考え方を働かせる為には、生徒が自分事として捉えられる課題を設定し、問題解決に向かう過程が大切だと捉えている。

生徒が、知覚と感受を結び付けながら、心から「こう表現したい」という思いをもって学ぶ時、音楽の世界に没頭する姿(意味づけ)がみられるのではないかと考えている。その過程で、「他者」との協働を通して、思考が発展したり、誰かに伝えたいという思いや願いが生まれたりする。生徒が、他者意識をもち、自分の表現や自分にとっての音や音楽の意味を探るようにしていきたい。

(2) 学びがつながる授業デザインと題材構成の工夫

授業デザインについて、小島(2015)は「授業に関する知識体系に基づいて実践し、実践検証を通じて知識体系自体を再構成する営み」とし、教師の個人的な経験知による教材研究で行われがちであった従来の方法を授業づくりと捉え、学習者が主体となって探究する授業デザインの必要性を述べている。

①学びがつながる授業デザインとは

生徒の学びがつながりにくい原因一つとして、学習の転移が生じにくいことがあげられる。学びをつなげる為には、今までの学習が意味のある手がかりとなるような活動(経験)を行うことが重要である。

そのことについて奈須(2017)は「子供たちが持っている(略)知識を、洗練させたり統合させていけるよう、教師が意図性や指導性を効果的に発揮すること」や「子供の既存知識を導入での意欲づけに使うのではなく、それで一時間、場合によっては単元全体を学び進めていくこと」が大切であるとしている。

本研究では、生徒の既存知識や経験をいかすことを「学びがつながる」と捉え、音楽活動を通して実感を伴い、学びが連続していくような授業デザインを目指していきたい。

②指導内容の中核を意識した題材構成の工夫

指導内容を明確にした授業について、小島(2015)は、「音楽は、様々な要素が複合的に絡み合って存在している。」と、この関わり合いを無視した学びは、生徒にとって学習の対象が明確化されにくい為、指導内容の明確化・焦点化の重要性を述べている。このことから、音楽科の題材構成が、生徒と音楽が相互作用した有用性のある学びになるよう「生徒の思考の発展過程」に沿い「教材と生徒をつなぐ」視点が、学びのつながりを考える上でも重要だと考えている。

本研究では、1つの題材において思考の拠り所となる音楽を形づくっている要素の中心が何であるのか焦点化し、表現を工夫するプロセスで、生徒の見方・考え方がどのように発展するのかを、教材研究を踏まえて想定し、学びのつながりを意識した題材構成を工夫していきたい。

4. 研究方法

- (1) 音楽的な見方・考え方を働かせ、生徒の思考が発展し、問題解決状況をつくる授業デザインを考える。
- (2) 問題解決のプロセスを見取る為、生徒の思考が残るワークシート(楽譜の活用)やOPP(One-Paper-Portfolio)シート等の工夫や対話を通じた学びを、1単位時間の授業の中に位置づけ、授業改善につなげる。

5. 研究の実際

(1) 授業デザインの視点

公立A中学校2年生，3クラス120名，令和4年9月12日～27日，合唱活動を2～3時間実践した。今回の授業実践にあたり，筆者のこれまでの授業における課題を踏まえ，3つの修正案を設定した。

これまでの授業における課題	3つの修正案
① 入賞が目的となり，教科の特性が授業に反映していない	① 音楽を学ぶ意義や学習の目的を意識した視点
② 取り組み自体に，集団指導のイメージが強い	② 学習者主体の授業になるよう，音楽の特質を意識したゴールを生徒と教師で共有
③ 各パートの音取りを含め，教師主導になりがちである	③ 生徒が主体的な問題解決へ向かう姿

(2) 授業の実際

3つの修正案を基に授業を行った。題材構成の工夫として，音楽の特質を意識した題材を貫く問いを持たせること，協働による問題解決の場面を設定すること，の2点を意識して行った。

第1時：音楽の特質に焦点をあて，生徒に認識させる為の時間として設定した。授業の最初に「音楽の力とは」「どのような合唱にしたいか」という問いを設定し，生徒の考えを記述させた。その後「音楽はなぜ存在するのだろうか」と投げかけ，生徒から出た意見をシェアした後，鑑賞活動を取り入れた。ジャンルが違う2曲の鑑賞を通して，感じたこと等を自由に伝え合い，共通点を見出させた。ペア，全体でのシェアを行った後，「音楽はなぜ存在するのだろうか」について，個人で自由に記述させた。授業の最後に「どのような合唱にしたいか」と最初と同じ問いかけを行い，OPPシートに記入，自分の思考の変化が可視化できるようにした。

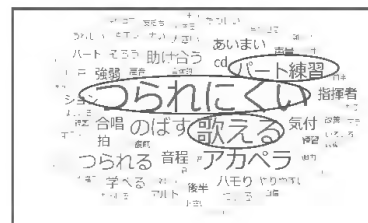


図1:生徒の課題
(テキストマイニングを活用)

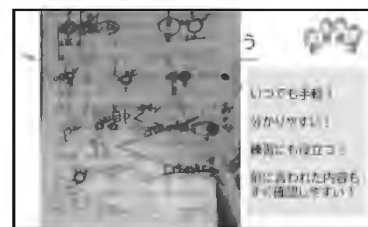


図2:生徒の書きこみのある楽譜
(学びのポートフォリオ)

第2時：自分達で課題を設定し，問題解決に向かう為の方法を一緒に確認していく時間として設定した。前時に生徒が必要だと記入した課題を，テキストマイニングで提示した(図1)。次に，録音を聴き，気になる場所や課題を楽譜へ直接記入させた。その後，テキストマイニングや録音でのメモを基に，意見交換を行った。その際，ペア→パート→全体と，生徒の意見から課題を設定できるようにさせた。意見交換で出た課題や解決方法のヒントも全て楽譜に記入させるようにさせた。練習時にも常に楽譜を活用させ，今までの課題や学びの過程が見えることで，生徒が学びを自覚化できるようにした(図2)。最後に行う合唱を録音し，本時の学びを自覚化させるようにした。楽譜に直接貼れる為，付箋紙を活用し，次回の課題と本時の学習の振り返りを行わせた。

第3時：生徒自ら課題を設定し，問題解決に向かうよう，生徒主体で学びが行えるように設定した。授業の内容は前時と一緒にだが，本時のめあても生徒が設定し，その為の問題解決に向かい練習に取り組ませた。授業の最後に，題材を貫く問い「音楽の力とは」についてOPPシートに記入し，まとめさせた。

6. 考察

生徒がどのように変容したのかを，3つの修正案の視点から考察をしていく。

(1) 修正案① 音楽を学ぶ意義や学習の目的を意識した視点

学級全体において，授業前には「教科だからやる」「深く考えずに授業に取り組んでいた」と記述していた生徒もいたが，題材を貫く問いを設定したことにより，授業後には「世界共通の言語になる」「人を幸せにするから」「音楽を通してみんながつながる」等，自分と音楽，音楽と社会との関わりについて記述する生徒が増えた(表1)。また，「一人でも伝わるけど，みんなで作るからもっと伝わる」「みんなで作えながら活動するのが楽しい」と，集団で音楽活動を行うことに意味を見出している生徒もいた。

生徒Aは授業前、音楽の特質に注目しない記述が目立っていた。しかし、鑑賞や意見交流を通して音楽への捉え方が変化し、音楽の特質のひとつである「表現」の良さや効果に気付き、合唱の目標において音楽に関連する記述が見られるようになった(表2)。

表1：題材を貫く問い「音楽の力とは？」の生徒記述 (OPPシートより)

<ul style="list-style-type: none"> ・音楽は、時には身近な娯楽だったり、またどうしようもない現実に差し伸べられた救いの手だったり、人の生活に寄り添う為の存在だと思いました。 ・「音楽」は個人プレイだと考えていたが、皆で一つの作品を創り上げることの楽しさや、難しさについて改めて気づくことができた。それぞれ音楽に向き合う意思や気持ちは違うだろうけど、全部ひっくるめて交流や表現のコミュニケーションのツールとなる音楽は、言葉よりも身近な意思疎通の手段なのかも…と思ったりする。

表2：学ぶ意義や特質についての記述 (生徒AのOPPシートより)

生徒A	合唱を学ぶ目的は？	どのような合唱にしたい？
授業前	他の人たちと全員で楽しく取り組む為	全員で歌いきれぬ力
授業後	合唱の力、歌の力を通して、伝える力。それを通した仲間とのつながりを実感する為	歌詞に込められた思い、合唱の楽しさ・魅力を歌で伝えられるようになりたい

(2) 修正案② 学習者主体の授業になるよう、音楽の特質を意識したゴールを共有

修正案③ 生徒が主体的な課題解決に向かう姿

毎時間の振り返りによれば、生徒が必要と考える課題を設定し、問題解決状況をつくることで、自分事として学びを捉える生徒が増えた。

また、生徒Bは、第1時では、何が課題かやどうしていきたいか等の記述がなく、表面的であった。第2時では、協働の学びを通してゴールを意識し、課題の原因や自分の状況を自覚することができていた。さらに第3時では、ゴール以外の視点にも結び付けながら広い視野で考えており、音楽的な見方・考え方を広げながら課題を追究し、よりよい表現を目指した問いも生まれていた(図3)。

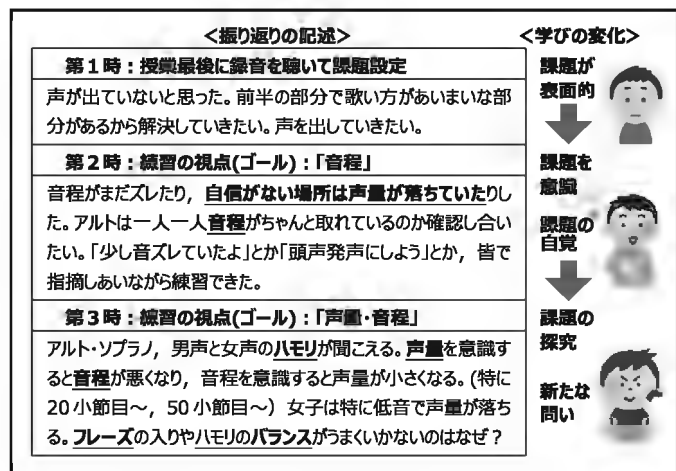


図3：振り返りの記述と学びの変化(生徒B)

7. まとめ

生徒の思いや願いから課題を設定することにより、問題解決場面において、今までの経験を生かしながら学びをつなげ、主体的に学ぼうとする生徒の姿が見られた。また、音楽の特質を意識したゴールを設定した協働での学びを通して、生徒は、音楽的な見方・考え方を働かせながら、試行錯誤し、思考を広げているように感じる事ができた。

今後の研究の方向として、見方・考え方の捉え方が弱い部分もあったので、授業改善の視点として生かしていきたい。次年度は、本年度の研究を基盤に、年間を通した題材設定の工夫や探究としての表現や鑑賞を実現する為のパフォーマンス課題や教科等横断的な学習への視点を取り入れていきたい。

引用文献

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会芸術ワーキンググループ, 2016, 『教育課程部会芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』(平成28年08月26日取得,

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/069/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/10/12/1377096_1.pdf).

小島律子編著, 2015, 『音楽科 授業の理論と実践 生成の原理による授業の展開』あいり出版.

奈須正裕, 2017, 『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社.

田村学, 2018, 『深い学び』東洋館出版社.